大学出版

2000 秋

No.47

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
47号

Autumn·2000

読書の周辺　イスラーム都市の魅力　▼　陣内　秀信　――　1

読書の周辺　フットボール、昔と今　▼　渡辺　融　――　6

第四回日・韓・中大学出版部協会合同セミナー〈共通主題〉

大学出版部の役割とは何か

―大学の変化と出版活動―　▼　伊藤　八郎　――　11

歩く・見る・聞く　知のネットワーク20　――　15

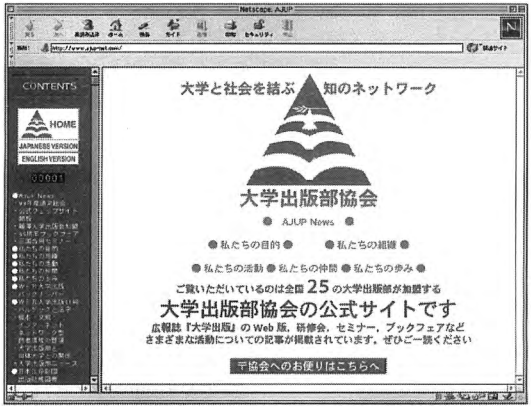
大学出版部ニュース　――　17

新刊案内2000.7-9　――　27

表紙イラスト＝ヨースト・アマン『職人図鑑』より

大学出版部協会マーク・デザイン＝道吉　剛

〈書籍の表示価格は税別です〉



大学出版部協会ウェブサイト
http://www.ajup-net.com/

イスラーム都市の魅力

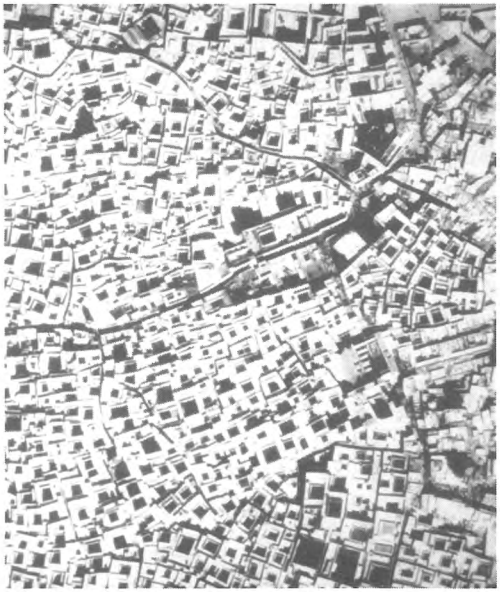
陣内　秀信

都市に対する考え方は、時代とともに大きく変わってきた。二〇世紀の前半に欧米から始まった近代都市計画の思想と手法は、人々に夢を与えるものとして、日本も含め世界中の都市に応用されてきた。ところが、一九六〇年代に入る頃、早くもその矛盾が噴出することになった。

ニューヨークでは、六〇年代の初頭、ジェーン・ジェコブスが『アメリカ大都市の死と生』（黒川紀章訳、鹿島出版会）で、近代的な再開発で生まれた高層ビルが建ち並び、広い緑地や広場をまわりにとるような都市空間はかえって犯罪の起こる危険な場所になること、そして活気を失い都市が衰退することを鋭く論じ、大きな影響を与えた。そして事態はまさにその通りに進んだ。都市問題を抱え込んだアメリカでは、その後、ジェコブスが予言したように、ゴチャゴチャしたダウンタウンの魅力が再評価され、クリアランスによらず、そのよさを引きだしながら再生する方向へと、都市計画の発想が大きく変わっていったのだ。

機能性や合理性を追求し、歴史や地域性を軽視した近代的発想の都市づくりの時代がこうして終焉を迎え、人間の感性を大切にし、個性のある質の高い環境を追求する新しい時代が到来した。こうなると、人々によって住みこなされ、さまざまな記憶や意味が詰まった歴史のある都市が新鮮な眼で見直されるのは当然である。

日本でも、高度成長期を経て、七〇年代以後の豊かな時代を迎えると、自分たちの都市環境の中にも、その文化的なアイデンティティを求める動きが強まった。町並みに関する関心が生まれ、景観や風景、あるいは地域の歴史が大いに話題になるようになった。そうした動きの中から、江戸東京論のブームも生まれたといえる。東京に受け継がれた江戸的な都市の特徴も描き出された。西欧近代の都市をモデルに考えた戦後の都市づくりの発想からの大きな転換が訪れたのである。世界のそれぞれの地域に、長い歴史の中で培われた魅力ある都市の文化が見出される、というご



上空から見たマラケシュの旧市街

くあたりまえのことが、ようやく認識されるようになった。アジア都市への関心も芽生えた。

そんな価値観の転換のなかで、イスラーム世界の都市への興味も急速に高まってきたといえる。

＊

地中海周辺の東から南にかけて広がる中東・イスラーム世界の都市は、どこも、我々の気持ちを高ぶらせる不思議な魔力をもっている。喧騒に満ちたスーク（バザール）と清澄なモスクの空間を核とし、迷宮のように広がる複雑きわまりないイスラームの都市を徘徊すると、その密度高く組み立てられた場の力に、誰もが圧倒されてしまうだろう。また、航空写真でアラブ世界やイランの都市を上から眺めると、まるで生き物のように有機的で変化に富んだ形をしている。曲がりくねった道路網のなかに、中庭をもつ住宅群があたかも細胞のようにぎっしりつまっている。

こうした独特の形態をとる中東・イスラーム世界の都市の面白さは、建築の分野では比較的早くから注目されてきた。だがそれは、あまりに機能性や合理性を追求し、つまらなくなった近代都市に対し、イスラームの都市に自然発生的で秩序のないヴァナキュラー（土着的）な都市造型の面白さを見るという発想に立つものだった。

ところが考えてみると、中東のイスラーム世界の都市は、西欧都市に比べ、ずっと長い都市文明の歴史を背後にもっている。紀元前二千年以上に遡るメソポタミアの古代都市に始まり、古代ペルシアの都市、ヘレニズムやローマ・ビザンツ都市と展開した古代都市の豊かな経験を背景に、綿々と続く都市づくりの知恵を受け継ぎながら、多様な要素を巧みに配置し、複合化させ、密度の高い都市空間を見事に築き上げてきた。

こうしたイスラーム世界の都市に、理にかなった秩序が存在することは疑いがない。ただそれが、単純な合理性に慣れきった現代人の目には、見えにくいに過ぎなかったのである。

特に、アラブ世界におけるイスラーム都市の旧市街は、

近代がめざした都市の姿とはまったく反対の性格をもっている。道は見通しがきかず、狭くてゴチャゴチャし、車も入れない。ロバや馬が行き交い、路上はとても清潔にはなりえない。緑はなく、広場や公園も欠如している。秩序のない、遅れた都市というレッテルが貼られてきたのである。

しかし、「人とモノと情報」が集まり、活気にあふれるまさに都市の原点が、イスラーム世界には見られる。建築や都市計画を専門とする者にとって、インスピレーションの源泉となりうる要素が、ここにはふんだんに散らばっている。

一九八〇年代に入って、急速にイスラーム世界の都市の捉え方も変わってきた。混沌としているように見えて、実は逆に、全体から細部に至るまで、ある秩序を持ちながら巧みに組織化された都市であることも明らかになってきた。

イスラーム都市の空間的な特徴を解明する研究は、アラブ人の研究者自身によっても近年、徐々に活発になってきている。なかでも、チュニスの旧市街（メディナ）を分析したB・S・ハキームの『イスラーム都市――アラブのまちづくりの原理』（佐藤次高監訳、第三書館）は、住宅内部の構成から都市全体の形態まで、系統的にその在り方に光を当て、アラブ・イスラーム都市の特質を考察している。

＊

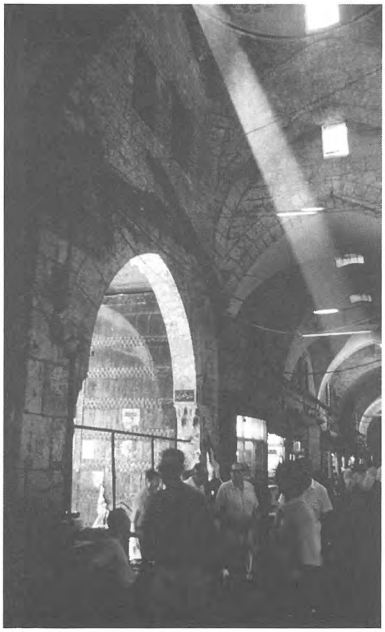
そもそも、「西欧の中のオリエント都市」ともいわれるヴェネツィアから都市の研究を始めた私にとって、イスラーム世界の都市に目を向けるのは、ごく自然なことだった。

まず、大学院の時期に留学していたヴェネツィアから、汽車で陸路を通って延々とイランのテヘランまで行き、一か月間、この国の建築と都市を見て回ったのが、イスラーム文化との最初の出会いだった。二六年も前のことである。この調査の旅の間、日本におけるイスラーム建築研究の第一人者の石井昭先生から、現地でたっぷりとイランの建築と都市の魅力について教えを受けたのである。その後も、さまざまな機会に中東各地のイスラーム都市を巡り、ますます私はその魅力に取り憑かれることになった。

都市はすぐれて学際的な研究対象である。そのフィジカルな構造、形態、景観から、社会の仕組み、制度、経済活動、人間関係、宗教の在り方など、あらゆる観点からアプローチしなければならない。特に、イスラームの活気に満ちた都市を巡っていると、我々の建築の分野を越えて、さまざまな視点から見てみたくなる。そんな思いでいた頃、当時東京大学東洋文化研究所におられた板垣雄三氏を中心に、文部省の重点領域研究として、「イスラームの都市性」に関する学際的な研究プロジェクトが実施され（一九八八年から三年間）、幸い私もそこに参加し、さまざまな分野の方々から多くの刺激を得ることができた。

それも大きな契機となり、この一〇年ちょっとの間、法政大学の研究室の学生達と、地中海周辺のイスラーム世界の都市を巡っている。建築の教え子が青年海外協力隊でモ

アレッポのスーク（右）と
ダマスクスの中庭型住宅（下）



ロッコに住んだり、シリアのダマスクスから留学生を迎え入れたことが弾みとなって、調査を実現することもできた。私の研究室からトルコやシリアに留学して、イスラームの建築や都市の研究に青春をかける若者も続いた。

こうして調査でイスラーム都市を訪ねる際には、その特質を描くのに、二つの大きなテーマをいつも考える。というのは都市空間が、商業を中心とする「公的世界」と家族の生活の舞台である「私的世界」とに明確に分かれているからである。そのどちらもが、ヨーロッパ都市にも日本の都市にもない特徴をもつ。

まず、都心部では、宗教ばかりか政治や社会の中心でもある大モスクを核とし、そのまわりに活気ある商業空間（スークあるいはバザール）が広がっている。小さな無数の店舗が並び、その背後には中庭をもつ隊商宿の建築（ハーンあるいはキャラバンサライ）が置かれる。しかも、社交場となる公衆浴場やマクハー（コーヒー店）があちこちに配され、全体として、高密度ながらゆとりのある高度に発達した都市空間を形づくっている。息抜きができたり、華やかな気分になれる場所も多い。街路にはしばしばアーケードが架かり、人工空間として環境が制御されている。ヨーロッパでは近代にならないと登場しないような都市の仕掛け、空間の発想を早い段階から獲得していたのだ。

一方で、伝統的な住まいと複雑に入り組んで構成される住宅地のつくり方が興味を引く。そんな迷路の中の家を一

つ一つ訪ね、実測をして、その建築的な特徴を調べると同時に、家族や生活に関する聞き取りを行うのである。外の街路は壁ばかりが続き、閉鎖的で鬱陶しいのに、一歩内部に入ると、別世界のように美しく快適な中庭の空間が待ち受けていることがよくある。そんな中庭で、コーヒーやお茶をご馳走になってのんびり過ごすのは、いかにも気分がよい。イスラーム世界では、どこでも人々はもてなしの心を示してくれる。

だが、こうして西アジアから北アフリカを巡っているだけでも、簡単に「イスラーム都市」としてはくくりにくい多様な都市の在り方が見えてくる。たとえば、先に述べた「中庭型の住宅」も、イスラーム都市の特徴としてよく引きあいに出されるが、実はアラブ世界やイランに広く見られる住宅の形式であって、同じイスラーム圏のトルコにはあまりない。斜面に発達したトルコ都市の住宅は、逆に外側に大きく窓をとって、眺望を大切にしている。もちろん、モスクの形式も地域によってずいぶん異なる。これが、もっと東の世界、特に東南アジアなどのイスラーム諸国に眼を向けると、都市や建築の形態もさらに大きく違ってくるのは当然だ。

イスラームという宗教、生活規範、そして価値観の体系と結びついた、イスラーム都市としての共通の特徴を探りながらも、気候風土や先行する歴史・文化などに裏打ちされた地域ごとの固有の都市の在り方を描き出す必要があるのだ。

もともとイタリアの研究から出発した自分にとって、そのイタリア、あるいはヨーロッパの都市や建築を新鮮な眼で見直すにも、実はイスラーム世界の都市を見て回ったことが大いに役立っている。ヴェネツィアの中にも、イスラーム都市の構造とよく似た性格が見出される。町の中心にあるリアルト市場には、人があまり住まず、商業機能（それと関連した行政機能も含む）が集中し、中東・イスラーム世界の都市の市場（スークやバザール）に似た雰囲気を漂わせている。また、狭い曲がりくねった迷宮状のメインストリートを抜けて、回廊の巡るサン・マルコ広場に躍り出る時の華やいだ気分も、イスラーム都市の空間体験とどこか重なる。そして、大運河沿いには、アラブ都市のフンドゥク（隊商宿）から影響を受けたフォンダコという名の商館が建ち並んだのである。

ヴェネツィアと同じように海洋都市国家として名を馳せたアマルフィ、そしてジェノヴァを調べていても、イスラームからの影響は随所に見られる。イスラーム世界と南ヨーロッパの都市の比較は、大きな可能性をもった魅力ある研究テーマだといえよう。

なお、イスラーム都市を対象に我々の研究室がこれまで行ってきた調査研究の成果は、法政大学出版局から『イスラーム都市の生活空間』として刊行される予定である。

（法政大学工学部教授）

フットボール、昔と今

渡辺　融

シドニーオリンピックの前に

本稿が世に出るのは、廿世紀最後のオリンピック、シドニー大会の「宴の後」になるはずである。今回のオリンピックで、いまのところ（七月現在）目につくのはチームゲーム型球技における日本の凋落である。この種の競技で本大会に日本が出場資格を得たのは、野球、ソフトボール（女）、サッカー（男）の三つだけで、東洋の魔女以来の伝統を誇るバレーボールをはじめ、少年層に人気があるバスケットボール、そのほかにホッケー、ハンドボール等、いずれもシドニー行きはならなかった。不振の原因は専ら高度経済成長時代以降これらの競技を支えてきた企業スポーツの衰弱にあるとするのが大方の観測で、日本スポーツ界の転機到来が云々される所以である。

スポーツ組織の構造改革という観点からすると、百年構想を発表して早々と学校・企業離れ、地域型のスポーツ組織、国際化への志向を表明、推進しているサッカーの活気は旺んである。スポーツの新しい在り方を示唆するものだろう。本大会での健闘を期待したい。

フットボール先進国

さて、フットボール系のスポーツでは日本は後進国であると考えられがちだが、決してそうではない。一六世紀後半期に三〇年以上も滞日し、長崎で没したルイス・フロイス（一五三二～九七）が日欧文化のアベコベ現象を紹介した『ヨーロッパ文化と日本文化』（邦訳岡田章雄、岩波書店、一九九一年、原著一五八五《天正一三》年、於肥前加津佐）には、「われわれの間では球戯は手でする。日本人は足を使って遊ぶ」という記述がある。四百年前の時点では、ボールを足で扱うことにかけては日本がヨーロッパよりも先進的であったと言えるのではないだろうか。

フロイスが言う「日本人の足の遊び」とは、彼よりもさ

らに六百年も前に清少納言が「様悪しけれど、鞠もをかし」と評した蹴鞠である。フロイスが見たのは、足利歴代将軍の鞠好きに増幅されて、当時全国の武士層に広まっていた蹴鞠の風景だった。彼が天正四年から四年間滞在した豊後の大名大友義鎮（宗麟）も京都の飛鳥井家から蹴鞠の免許を得ていたし、また、同時代、薩摩島津家の重臣上井覚兼の日記（『上井覚兼日記』天正二～一四年、「大日本古記録」所収）には、当時覚兼の邸内に四本懸を植えた正式の蹴鞠のコートがあり島津家の若侍たちが兵馬倥偬の間を縫って盛んに蹴鞠を楽しんでいたこと、また、朋輩の伊集院忠棟が上京の節に飛鳥井家から蹴鞠道の伝書を貰っていたこと等の記事があり、フロイスの観察が確かだったことを裏付けている。

浅草の曲鞠芸

このような事情によって中世・近世の日本でも蹴鞠は結構盛んで、なかには名足もかなりいた。江戸後期の肥前平戸藩主松浦静山（一七六〇～一八四一）の膨大な随筆集『甲子夜話』には、天保十二年（筆者注　静山の没年）、江戸浅草の奥山で評判だった鞠芸人の曲鞠芸が絵入りで紹介されている（東洋文庫本『甲子夜話』三篇第七七話）。そのなかから目ぼしいものを拾ってみよう。

一　煙草吃（タバコノミ）　鞠を蹴上げながら片手に草盆を提げ、もう一方の手にもったキセルで煙草を吸う。

二　襷掛（タスキガケ）　蹴上げた鞠が落ちてくるところを身体で受け、襷を掛けるように上体の表面に添って鞠を転がす。

三　八重桜（ヤエザクラ）　蹴上げて落ちてくる鞠を、まず肩で受けとめてから腕の方へ流し、次にこれを跳ね上げて額の上で上下させ、さらに頭頂部でも衝いて上下させる。（図4）

図1　乱杭渡（ランゲイワタリ）

図2　負鞠（オイマリ）

図3　文字書（モジカキ）

図4　八重桜（ヤエザクラ）

四　負鞠（オイマリ）　高く蹴上げて落ちてくる鞠を背中で受け止め、其処で上下させる。（図2）

五　足袋脱（タビヌギ）　右足で鞠を蹴上げながら、左足の足袋を脱ぐ。

六　文字書（モジカキ）　鞠を蹴上げながら紙上に字を書く。（図3）

七　乱杭渡（ラングイワタリ）　地上三尺（約九〇センチ）の高さで距離二間半（約四・五メートル）にわたって立ち並んでいる杭の列の上を、鞠を蹴上げながら歩いて渡る。（図1）

八　下り藤（サガリフジ）　前記七が終わったところで、松の木に両手でぶら下がり、浮いた足で鞠を蹴上げる。

九　梯子登（ハシゴノボリ）　鞠を蹴上げながら階段を上り下りする。

十　八橋（ヤツハシ）　八つに折れ曲がった細い橋板の上を鞠を蹴上げながら渡る。

などで、どれも難度が高そうな技である。

蹴鞠の三拍子、サッカーの二拍子

これらの技は二系統に大別できる。一つは、鞠を足で蹴上げながら何かもう一つ別の仕事をする技である（一、五、六、七、八、九、十）。この系統の基本技は鞠を連続的に蹴上げることで、現代サッカーでいえば、ボールリフティング、あるいは、ボールジャグリングにあたる。

蹴鞠では、地面に落とさず鞠を蹴上げ続け、その回数を数えることを「数鞠」あるいは「数」という。正式の鞠会は時間軸に添って序・破・急三段の順で会の次第が進められ、各段でのプレーの内容は概ね決まっていた。数鞠は最後の急の段で、数を数える役人をつけて行われた。つまり、鞠会の大詰めの種目として、一座八人が協力して記録を狙う数鞠があったのである。蹴鞠道設立の主導者だった鞠好

きの後鳥羽院（一一八〇～一二三九）は、ある鞠会で鞠数二千余という大記録を作り、喜びのあまり使用した鞠に五位の位を与えたという話さえ残っている（『道家公鞠日記』前田育徳会尊経閣文庫所蔵）。

蹴鞠では鞠を蹴上げる足は何故か右足に限られていた。箸を右手で扱うのが正しい作法であるという観念と共通の文化風土の産物であろう。したがって、一人で続けて鞠を蹴上げる場合、サッカーのリフティングのように歩行と同じリズムで、左・右、左・右と交互に蹴ることはできない。蹴鞠の術語ではフットワークを足踏と言う。連続的に鞠を蹴上げる場合の足踏の要領は次のとおりだった。まず、右足で鞠を蹴上げた後、右足を着地する、次に左足を（挙げて）着地し、しかる後に、右足を挙げて鞠を蹴る。つまり、ポン（右蹴）→トン（右着地）→トン（左着地）→ポン（右蹴）→トン（右着地）→トン（左着地）、…　…　…、という、日常的な歩行とは異なるリズムの繰り返しになった。これを三拍子と呼んだ。

筆者の考えるところでは、前掲の鞠芸の中では、鞠を蹴上げ続けながら細い杭の列の上を三拍子で渡る「七　乱杭渡」が最高難度の芸と思えるがどうだろうか、ぜひ現代サッカーの名足たちの意見を聞きたいものである。

もう一つの系統の芸は、鞠の落ち際を上体や頭で受け止め、其処でこれを衝き上げて上下させ、また、身体の表面に添ってこれを転がす技である（二、三、四）。

鎌倉時代に成立した蹴鞠道、即ち、公家鞠では鞠足は冠または烏帽子を着けていたから、ヘディングは不可能であった（筆者注　前掲の八重桜にはこれがある）が、肩や胸、背中などで鞠を受け止め、これを身体に添って転がすことは重要な技であった。飛んでくる鞠を、身体でストップし、身体の表側に添って足元まで転がして下し、足先に鞠が乗ったところで蹴上げる技を傍身鞠（みにそうまり）と呼び、蹴鞠では最も高度な技（曲足、曲鞠）としていた。

江戸後期の難波家の当主難波宗城（一七二四～一八〇五）が編んだ書物『名足類聚』（天理大学付属天理図書館所蔵）は、飛鳥井、難波、御子左の公家鞠三流の他、賀茂社家や外郎派などの地下流をも含めて、古今・上下の曲足百五十余種を考証したものである。その中には前掲の負鞠（オイマリ）の名があり、御子左と飛鳥井両流の技とされている。しかし、他の二つの芸、すなわち、襷掛けと八重桜の名はどの流派の技にも見当たらない。件の鞠芸人が自ら開発したものだろうか。

蹴鞠の曲足のなかで最もよく知られている「衣紋流し」は、鞠を一方の袖（腕）に受け、そこから襟を経て反対側の袖まで流し転がす技である。本来「流し技」の最終目的は、鞠を足元まで流し下して足先に乗ったところでこれを蹴上げることだったはずなのだが、衣紋流しの場合には、むしろ、流す過程を見せるのが目的だったらしい。襷掛けや八重桜もこれに似た見世物芸だったのだろう。

禁制よけ

松浦静山自身飛鳥井家の門弟で、蹴鞠には詳しかった。前記の記事で、彼は「身柄ゆえ観にも行かれず…」と記している。天保十二年は彼の没年、八十二歳だから無理もなかろう。実際に芸を見届けたのは「近従の輩」で、情報源はこの近臣の話と彼が買い求めて来たらしい「蹴方の番付」だった。件の鞠芸に対する静山の所見は次のとおり。

「この鞠夫が蹴方の番付と云ふを売施せるには『大坂表より、風流曲手鞠、大夫菊川国丸罷下云々』と。されども全く蹴鞠にして手鞠に非ず。是等は京師飛鳥井家の責を避るなり。又見よ。鞠に紋を描きたるも蹴鞠の鞠に非ざるを示すなり。或る人曰く。江都の鞠弟子（筆者注　飛鳥井家の）が観たるに、如何にも上足にして、実に曲鞠と謂ふべし。されども門下の鞠者とは云ひ難しと。然るべき言なり。又云ふ。実は江都京橋辺の鞠工の子にして、性鞠を好み、且つ曲鞠を為すこと専らなれば、其父の勘当を受て、京へ上りたるが、大坂と称して東下せしと。要するに翫覧して眼を喜ばしむるの用のみ。」

つまり、この鞠芸人は「大坂風流曲手鞠」（傍線筆者）の一派という触れ込みで演じていたが、静山の見るところ紛れも無く蹴鞠であって手鞠ではない。手鞠と称しているのは飛鳥井家の咎めを恐れたからであるという。また、ある人が言うには、非常に上手だが飛鳥井流の蹴鞠ではない。この者は本当は江戸京橋辺の鞠作りの息子なのだが鞠上手なうえに好んで曲鞠を演じたがるので、飛鳥井家の咎めを恐れた親に勘当された。そこで、いったん上方へ行ったが、今度大坂者と称して帰って来たのであると。

ここで言及されている「曲鞠」あるいは「飛鳥井家の咎め」とは、江戸時代、蹴鞠道家が代々の徳川将軍から保証されていた権利だった。即ち、飛鳥井・難波家以外に蹴鞠道で弟子を取ることや、道家の許しを得ずに勝手に曲足・曲鞠を演ずること等を禁じたものである。これに触れて飛鳥井家を破門されたり、幕命で遠島されたりした例が見られる。

終章

この鞠芸人も自らの修練で開発した曲足を公演して禁制に触れることを恐れ、「蹴鞠」とせずに「手鞠」と称し、蹴鞠の表皮に手鞠のような模様を施したのだろう。ここには、体制が庶民の自由な身体芸の表出を阻んでいる様子が描かれている。歴史やスポーツに「れば・たら」は無用ではあるが、日本のフットボール発達のためには惜しむべきことだった。

転機にある現代日本の球技界も悪しき伝統や旧観念、旧体制にとらわれない自由な発想と柔軟性のある制度作りによって再起してほしいものだと思っている。

（放送大学教授）

第四回日・韓・中大学出版部協会合同セミナー〈共通主題〉

大学出版部の役割とは何か—大学の変化と出版活動—

伊藤 八郎

一 日本における大学改革の現段階

日本ではこの十年の間に、主に国立大学を中心に大学の「大改革」が進行しました。この大改革は、太平洋戦争敗戦後の大学改革以来の、「戦後第二の大学改革」と呼ばれています。

それでは、それはどのような背景を持って行われているのか、どういう改革が行われているのか、主要な点についてご報告いたします。

1 大学改革の背景

（一）規制緩和の一環

今日の大学改革が、一九八〇年代の中頃から経済の領域を中心に広く議論されるようになった、中央政府の企業や自治体などにたいする規制の撤廃、いわゆる「規制緩和」の一環であるといえます。

日本の教育も、大学・学校も長い間、政府＝文部省のきびしい管理・統制の下に置かれてきました。規制を緩和し撤廃することなしには、教育と研究の危機、大学や学校の危機を打開し改革を促し、活性化することはできないという背景があります。

（二）大学教育のユニバーサル化

日本では一九九二年の二〇五万人をピークに以後加速度的に減少を続けている十八歳人口は、二〇〇〇年には一五一万人、二〇〇九年には一二〇万人となり、ピーク時の約六割にまで減少すると予測されています。

そしてついに二〇〇九年には、志願者の一〇〇％がいずれかの大学・短大に入れる時代がやってくる、進学率はじつに五八・八％になるという試算があります。まさに大学教育の普遍化の時代であり、一方で「大学・短大淘汰」の時代、「大学生き残り戦争」の時代がすでに進行しているという背景があります。

（三）科学技術・学術振興の新たな展開

大学の高度な研究に対する期待の高まりは、厳しい国際競争下で、技術力の国際的優位を脅かされつつある産業界の危機意識のあらわれでもあります。深刻な不況下で企業の研究開発費は減少し、欧米なみの公的投資を政府に求める声が高まり、政府関係研究機関の層が薄いわが国においては、期待は主として大学の研究に向けられます。さらに

国際競争力を担う研究人材の養成を考えれば、国立大学の危機は、産業界の危機に直結するものといえます。そして、科学技術・学術振興政策の新たな展開は、大学の研究・教育の改革を迫るという背景があります。

2　大学改革の主要点

（一）国立大学の改革

⑴大学設置基準の自由化（大綱化）

日本には「大学設置基準」というものがあります。これにより、四年間の学部教育は、専門教育・一般教育それぞれ二年の二段階に分かれ、一般教育は外国語、保健体育を必修とすることなどが定められていました。また学部の名称や教育課程についても定めがあり、とくに一般教育については「教養部」と呼ばれる独立の教員組織を置くことになっていました。

一九九一年にこの基準が改正され、こうした規制が撤廃されました。それは戦後の新制大学の発足以来つづいてきた基準の自由化（大綱化）であり、画期的な変化を大学にもたらしました。

⑵大学院の拡充

研究者養成、高度専門人材養成、社会人再教育、留学生受入れ、先進諸国の大学院の規模の比較などの観点から、一九九一年に大学院生倍増計画（二〇〇〇年までに）の方針が出されました。それにより、一九九九年時点ですでに大学院入学者はほぼ倍増し、今後大量の大学院修了者が生まれることになります。

⑶大学院の重点化（部局化）

現在、いわゆる旧七帝大を中心に大学院の重点化（部局化）が、急ピッチで進行しています。その主な内容は次のとおりです。

①従来学部に置かれていた講座を大学院研究科に移し、大学院を教育研究一体の組織として部局とする。

②学部は学士課程の教育を行う教育専門組織とし、大学院研究科所属の教官が兼担する。

③教官当たりの校費は、学部から大学院研究科に移すが、学部には新たに新単価の校費を配当する。

従来、日本では部局といえば主に学部のことであり、多くの教員は学部に所属していたのですが、この学部の教員組織をまるごと大学院研究科に移して、それを部局にするという、これも大改革といえます。

⑷大学の自己評価、第三者評価

大学設置基準の自由化（大綱化）と並ぶ主要事項として、大学設置基準に大学に自己点検評価の努力義務を課する条文が追加されました。つまり、大学の「質」の保障としてのアクレディテーション（accreditation）が求められたわけです。

これにより、各大学は次々と自己点検・自己評価の報告書を公表しています。さらに、学外の第三者による評価システムも導入されつつあります。これも以前の国立大学で

は考えられなかった、まことに大きな変化といわざるをえません。

(5)学内管理・運営制度の整備

一九九九年に国立学校設置法が改正となり、評議会が法制化され、教授会の組織権限も明確となり、学外の意見を反映するための機関として「運営諮問会議」が位置づけされました。日本においては五十年間問題であり続けたことであり、大変大きな変化といえます。

(6)独立行政法人化

現時点で国立大学にとってきわめて重要な問題であります。政府は公共性の高い事業を効率的、効果的に行わせるために独立行政法人制度を創設することにし、一九九九年独立行政法人通則法が制定されました。これによって多くの国立機関が独立行政法人に移行することが決まりましたが、反対意見が強い国立大学については、二〇〇三年までに結論を出すことになりました。しかしながら、文部省は、二〇〇〇年の早い時期に結論を得たいとしていて、成り行きが注目されています。ただしこの独立行政法人化問題は、公務員の定員削減計画の一環であり、真の意味で大学改革とはいいがたいといえます。

(二)私立大学の改革

教育改革に早くから積極的に取り組んできたのは、国公立大学よりも私立大学であるといえます。財政基盤の保障された国公立大学と違って、学生納付金を最大の収入源とする私立大学は、人口変動をはじめとする変化を的確にとらえ、対応することなしに、存立と発展の安定的な基盤をもちえないのです。

具体的には、新名称の学部・学科の新設、教授法の改善、シラバスづくり、補習授業、一般教育と専門教育のカリキュラムの再検討、さらには入試方法の多様化などは、いずれも私立大学によって主導されてきた一連の「大学改革」の方向です。

入学者が定員を下回る私立大学の割合が増す中で、私立大学における大学改革も、全体としては始まったばかりといえます。

二　日本における大学出版部の役割

1　出版部の存在そのものの役割

日本においては、近年大学出版部の設立をめざす大学がとくに多くなっています。大学出版部協会加盟の二十五大学出版部のうち、ここ十年ほどの間に設立された大学出版部は六校になります。その他にも「大学出版部をつくりたい」という相談が多くあります。

こうした動向は、現在進行している大学改革と関連していると考えられます。つまり、とくに私立大学を中心として、大学としてどう生き残るのかということが最重要課題となり、「生き残り」戦略としての魅力ある大学がテーマとなっています。その点で、「大学出版部を持つこと」、つ

まり出版部の存在そのものが個性的大学づくりの一つの重要なファクターとなるでしょう。

2　出版活動を通じての役割

大学出版部の本来的な役割は「出版という仕事を通じて大学の機能に参加すること」であると考えています。そうであるならば、現在進行している大学改革に出版という仕事を通じて、どのように対応することが出来るのか。以下に列挙してみます。

（一）良質のテキストの刊行

大学設置基準の自由化等の改革により、カリキュラム編成の自由化などそれぞれの大学が、独自の教育理念と教育目標を掲げ個性的な大学づくりをめざすことになり、それに対応する良質なテキストの刊行は、大学出版部の重要な役割となるでしょう。一方で、ユニバーサル化する大学においては、教育のための新しいテキストが求められることになると考えられます。

（二）高度な専門書の刊行

大学院重点化による多くの研究成果、とりわけ最先端の研究成果を高度な専門書として刊行するという役割は、これまで以上に期待されることになるでしょう。

（三）個性化、多様化に対応する図書（電子媒体他）の刊行

さらに、それぞれの大学が個性化、多様化することにともなった教養書、啓蒙書を刊行することも必要になってきます。また、書籍という媒体だけにとどまらず、CD－ROMやビデオという媒体による出版も急速に対応が迫られることになるでしょう。

おわりに

日本の大学はまだまだ改革の渦中にあります。この改革がストレートに大学出版部の活動に反映しないところに、出版というもののむずかしさがあるように感じています。

今回の報告では、日本における「大学改革」のアウトラインと大学出版部の課題の提起のみとなりました。次回以降のセミナーではその具体的な内容、大学改革においては大きくは大学連合などの動きや、FD（ファカルティ・ディベロップメント）などの取り組みの状況が明らかにされる必要があるでしょう。大学出版部の役割についても、端緒的であっても大学改革にともなうテキスト刊行の経験や、それぞれの大学の変化にともなう出版活動の変化の内容が報告されれば、一層意義あるセミナーになるでしょう。

（名古屋大学出版会専務理事）

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 20

考古学資料の宝庫

関西大学博物館を訪ねて

関西大学の正門をくぐり、左手の法文学舎へと続く坂をのぼりきるとクスノキの大樹が気持ちのよい木陰を作っている。博物館は、その木立に囲まれるように建っていた。

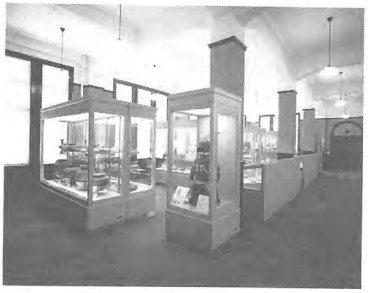
この博物館の収蔵資料は考古学・歴史学・民俗学・美術工芸等の各分野におよび、全部で約一万五千点を数える（重要文化財十六点、重要美術品十二点を含む）。中心となるのは考古学関係資料で、日本の先史時代から歴史時代、海外の考古学・歴史学関係資料を主に収蔵している。展示資料の中核となっている「本山コレクション」は、元毎日新聞社社長・本山彦一（松陰）氏の収集によるもので、その質の高さからいっても第一級の文化財といえるだろう。

博物館の玄関を入ってまず目についたのは朱（水銀朱）塗りの家型石棺である。これは奈良県生駒郡斑鳩町で発見された藤ノ木古墳の石棺を復元したもので（凝灰岩製）、石棺がどのようにして石室に埋納されたかを実験で確かめるために作られた。発掘調査の際には、これを使って石棺の蓋を開けるシュミレーションも行われたという。

展示室（二階）は第一展示室と第二展示室の二部屋からなっており、第一展示室では、入口から向かって右側に縄文時代・弥生時代の資料、左側に古墳時代の資料が展示されている。縄文時代・弥生時代の資料の中で特に目を引いたのは、入ってすぐの所に展示されている縄文時代前期の玦状耳飾であった〔重要文化財、大阪府藤井寺市の国府（こう）遺跡から出土〕。この資料については、同館の山口卓也学芸員から次のような説明を聞くことができた。

「この遺物は人頭骨といっしょに出土しており、頭部側面に接して出土したことから耳飾であると判断されました。しかも、その出土状況から、飾りの切れ込みに耳たぶを差し込むのではなく、耳たぶに穴をあけて装着した、いわば大型のピアスのような耳飾であることも解明されました。古代の装身具の具体的な使用法が分かった点で貴重な資料といえます」。

縄文時代の資料としては、ほかにも土器や土偶、石器類が多数展示されており、石鏃・石槍などの打製石器や石斧・



石棒などの磨製石器、釣針・銛といった骨角器などから、縄文人がいかに多種多様な道具を使い、いかに高い製作技術を持っていたのかを理解することができた。

弥生時代の資料としては、銅鐸や銅剣、石包丁などのほかに、東北、東海から九州にいたる各地の土器が多数展示されている。なかでも大阪府堺市四池遺跡出土の蛸壺型土器は、大阪湾でイイダコ漁が行われていた証拠となる資料で、当時の人たちの食生活の一端がしのばれて興味深い。

古墳時代の資料のうちでは、重要文化財に指定されている石枕（伝奈良県天理市渋谷出土）に目を奪われた。埋葬の時に使用するという石枕は、同様のものがもう一点展示されているが、両者を比較すると、被葬者の身分の差や地域差などが想像でき、この点でもおもしろかった。

第二展示室には古墳時代の復元甲冑（故末永雅雄名誉教授復元）や朝鮮半島、中国、東アジア、オリエント、ヨーロッパ、アメリカ大陸などの海外資料が展示されている。ここでは、復元甲冑によって、古墳から出土する甲冑が実際、どのように着装されていたのかを知ることができるし、革綴じから鋲留めへの変遷なども観察できておもしろい。

海外の資料としては、中国の青銅器や甲骨、朝鮮半島・新羅や高麗時代の蔵骨器、台湾・新石器時代の石器、エジプトの護符、ローマ時代のガラス器などが収蔵されている。

普段私たちは、古代と現代は全く別の時代であり、そこに生きる人たちも全く別の人間であると思いがちである。しかし、博物館に展示されている品々を見ると、時代が変わっても人間そのものはそれほど変わらない、ということを改めて感じさせられる。物（展示品）を通してではあるが、いつの時代も変わらない人間としての喜怒哀楽、生活に対する苦労やよろこびといったものが、その背後に見え隠れするのである。博物館に足を運び、展示品を通して、ゆっくりとこうした対話をするのも、たまにはいいだろう。博物館の良い点は、意外とこんな所にあるのかもしれない。

（関西大学出版部・熊　博毅）

関西大学博物館

〒564-8680
大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
交　通：阪急千里線「関大前駅」下車（徒歩10分）
開館日：月・火・木・金曜日の午前10時から午後４時まで（水・土・日曜日・祝日ならびに夏季・冬季休業中その他の大学が定めた日は休館）
電　話：06-6368-1171（ダイヤルイン）

大学出版部ニュース

▼「第四回日・韓・中大学出版部協会合同セミナー」報告

はじめに

第四回三ヶ国セミナーは協会夏季研修会開催期間中の八月二五日、滋賀厚生年金休暇センターにおいて開催された。中国側派遣団へのビザ発給が開催直前まで確定せず、何人が参加できるのかハラハラしながらの幕開けであったが、幸い中国大学出版社協会一七名、韓国大学出版部協会二三名の出席を得ることができた。

共通理解と協会活動

セミナーは三ヶ国代表団団長の挨拶に続き、午前中に三分科会が開催された。笹岡五郎（専修大学出版局）、嶋田努（東京電機大学出版局）、小林敏（慶應義塾大学出版会）三氏の司会進行により、合計九本のレポートが三ヶ国講演者によって発表された。

午後は、午前中の分科会報告に続いて、三ヶ国講演者による共通主題が報告された。分科会、共通主題共に活発な質問が連続し、質疑時間が不足するという事態が生じたが、第四回セミナーで提出された議論は、第五回の中国開催に向けて継続されることになるだろう。また今回のセミナーには「大和銀行アジア・オセアニア財団」の国際交流助成を得て通訳者一〇名を動員でき、さらに三ヶ国出版部の基本資料を作成することができたことも特筆される。（セミナー講演の詳細と基礎資料については夏季研修会において配布されました。）

大学出版部協会国際担当幹事　三浦義博（東海大学出版会）

▼「第五回拡大編集部会」を開催する

七月一四日（金）、一五日（土）の二日間、群馬県嬬恋村の東海大学嬬恋研修センターにて「第五回拡大編集部会」が開催された。

今回のテーマは、「『企画』の全体像」。ともすれば抽象的な議論になりがちなテーマではあるが、日常業務に則して、造本設計、原価計算、刊行スケジュール、販売活動など、具体的かつ実践的な議論が交わされた。

参加者は一四名。幹事会、営業部会、刊行助成部会と部会を横断したメンバーが集結した。また、在京以外では東北大学出版会からの参加があった。

出版界の不振が伝えられる現在、「企画」に対する工夫や創意が体験を交えながら語り合う時間をもてたことは、非常に有意義であった。

「企画」というまさに総合的なテーマを敷衍して、いくつもの各論に移っていけるのではないか。そういう手ごたえを得た会であった。

北海道大学図書刊行会

▼吉野悦雄著『**複数民族社会の微視的制度分析**』（A4判・一二〇〇〇円）リトアニアの四六家庭への長時間聞取による詳細な家系図作成を通して民族共存の条件を探る。▼岩井浩・福島利夫・藤岡光夫編著『**現代の労働・生活と統計**』（A5判・四二〇〇円）現代日本の労働者が抱える問題点を最新の数値を基に解明した統計による日本労働分析。▼谷本一之著『**アイヌ絵を聴く**』（B5判・一六〇〇円）江戸幕末史料とその後の調査記録を対照してアイヌ芸能（音楽や舞踏）の時間的変化過程を検証。アイヌ文化の変容と同化の様相を示す。付録CD。▼戸苅賢二・土屋篁著『**北海道の石**』（四六判・二八〇〇円）普通にみられる基本七〇種を収録した岩石と鉱物の図鑑。▼池田久實監修・霜山龍志編『**輸血学**』（B5判・一二〇〇〇円）臨床医学および社会医学的観点に立ち現代輸血学の最新情報を解説。▼大崎直太編著『**蝶の自然史**』（A5判・三〇〇〇円）可憐さに秘められた進化の謎を解明。▼工藤岳編著『**高山植物の自然史**』（A5判・三〇〇〇円）お花畑に秘められた厳しさと適応の進化。

聖学院大学出版会

▼渡邉守道著『**ニコラウス・クザーヌス**』（A5判上製、本体五六〇〇円）

十五世紀の思想家ニコラウス・クザーヌスが、書き記した文書は、数学的問題から、認識論、イスラム教に対する理解など驚くほど領域が広く膨大なものである。その中でも、これまで、ヤスパースをはじめとしてクザーヌスの哲学的著作がおもに取り上げられ、哲学者としてのクザーヌス思想の特質が論じられてきた。著者は、しかし、長年、クザーヌスの政治思想に着目し、対外的にはオスマン・トルコの侵攻に直面し、対内的には皇帝と教皇の権力分立の中で分裂の危機に直面していたヨーロッパ・キリスト教会が、M・ルターの宗教改革に先立つ八十年前にいかに内部改革を進めながら、危機に対処していったかをクザーヌスの公会議主義との関わりを中心に論じる。

アメリカ・クザーヌス学会会長として、世界のクザーヌス研究をリードしてこられた著者ならではの「クザーヌス研究の現況」についての詳細な報告とクザーヌス政治思想の現代における意義が明らかにされている。

麗澤大学出版会

▼ジョン・グリビン著／立木教夫訳『**宇宙進化論**』（本体三六〇〇円）

「宇宙」という言葉は、実に魅力的な響きをもって、私たちの想像力をかきたて、ロマンをさえ感じさせる。一方で、その宇宙の生成・構造・未来を探求する「宇宙論」は、最新の科学的知見とテクノロジーを綜合した科学の最先端を行く学問と言ってよい。

本書は、宇宙には興味を持っているが、宇宙論の難解さにはついていけないと嘆じている一般読者のために書かれた、現代宇宙論最前線からの報告である。ビッグバン、ブラックホール、多重宇宙論などの最新の研究成果を踏まえ、宇宙の進化メカニズムを解明、「宇宙は多数存在し、かつ生きている」という脅威の結論が導かれる。

『宇宙進化論』
本体3,600円（税別）
四六判・上製・400頁

慶應義塾大学出版会

▼西村顯治著『生命探求の姿勢―ヴェサリウスからゲノム解析まで―』（二五〇〇円）16世紀から20世紀末までのライフサイエンス史を、人物とテーマで織りなした啓蒙書。自己の目と頭脳、判断力を出発点とした近代科学の創始者たちの気概を、今に蘇らせる。先人たちから受け継ぎ、次の世代に受け渡す科学文明とは何かを探る好著。

▼熊倉敬聡著『脱芸術／脱資本主義論―来るべき〈幸福学〉のために―』（三〇〇〇円）人々を疲弊させる資本主義のあり方に疑問を呈し、脱資本主義的価値の実現を試みる「脱芸術」への考察等をとおして「がんばらなくてもいい社会」を模索する。

▼ハインリヒ・ヴェルフリン著／海津忠雄訳『美術史の基礎概念―近世美術における様式発展の問題―』（一〇〇〇円）西洋の16世紀（盛期ルネサンス）と17世紀（バロック）の美術を対象に、フォーマリズムの方法論を打ち立てた名著が完全新訳で登場！　原著刊行時には、芸術家の歴史としての美術史ではなく、様式の発展に注目した「人名なき美術史」として議論を巻き起こした。美術研究者必携。

産能大学出版部

▼『経営構想の策定と実現』鈴木成裕著（二六〇〇円）

変化常態、グローバル化の中で、企業の競争優位は「構想力」如何にかかっている。本書は経営構想の立て方・磨き方、それを実現するための具体的な進め方・留意点を示したものである。また構想実現を妨げる幾多の障害を解決していくプロセスも明示。豊富な事例を持つ当代一流の著者が究明する。

▼『経営者のＩＴ知識』猪目宰正著（一八〇〇円）

今後、企業間の情報システムは取引間相互のシステムと連携して動く。ＩＴ構築は企業にとって焦眉の急の問題であり、経営者はどんなポイントをもってＩＴ構築・投資の意思決定をすべきか。

そこで経営者が留意しなければならないのは、ＩＴ導入で直ちに生産性向上・利益貢献ができるという錯覚。巨額の投資をしても成功例は稀。それは経営者がＩＴ業者、技術者、評論家の言に引きずられて投資を行った結果である。本書はそのような愚を避け、情報システム成功への留意点を述べたものである。

専修大学出版局

▼藤本一美『戦後政治の争点 1945-1970』（三三〇〇円）本書は、戦後政治の主な論点について、一九四五年から一九七〇年までの二六年間を一年毎に取り上げて、その年のイッシューを摘出して「保守と革新」の対立軸から分析を行っている。

筆者はもともと、米国現代政治を研究対象としてきたが、二〇〇〇年の時点に立って、日本人として筆者自身が歩んできた戦後政治との関わりを踏まえて、政治や社会の主要事件が、既存の資料を駆使しビビットに扱われている。これまで、戦後政治の分野については、信夫清三郎の『戦後政治史』がスタンダードな研究書として知られていたが、本書の出版によって、新たな視点から戦後政治を再考できるであろう。

玉川大学出版部

▼金剛永謹『金剛家の面』(三五〇〇〇円)　金剛流では代々の宗家が面に対して造詣が深く、在来のものに加えて歴史的な蒐集を続けてきた。その金剛家秘蔵の面のうち、「是閑」「河内」など室町時代の面を中心に桃山・江戸初期までの優品九八面を表裏ともに原寸カラーで収録。写真二一〇点。金剛流二十六世宗家継承記念。

▼天野郁夫編『学長 大学改革への挑戦』(二五〇〇円)　いま、日本の学長に求められているものは?　松前達郎(東海大学)、井村裕夫(京都大学)、清成忠男(法政大学)、上野一郎(産能大学)など一六人の学長へのインタビュー集。多様な見解や意見から浮かび上がる大学改革の方向と学長像。

中央大学出版部

▼山内惟介編著『国際契約法』(三一〇〇円)　広範な領域を対象とする国際取引法の分野の講義対象も基本的な分野に限定されざるを得ないなか、国際取引に関する実体法的規律の基礎ないし中心部分を成す国際契約法を選び基礎的思考力の着実な体得と、その初歩的応用の機会を提供することを目的としたテキスト。

▼ウィーン民衆劇研究会編訳『ライムント喜劇全集』(上)(下)(各四〇〇〇円)　オーストリア演劇史を代表する喜劇作家であり生粋の舞台人でもあったライムントの荒唐無稽な東洋と眉唾物の西洋、美徳と悪徳の闘争の物語などの作品を通して、十九世紀前半のウィーン社会が何に感動して何を求めていたかを解明。

▼中央大学大学院総合政策研究科日本論委員会『日本論—総合政策学への道』(三三〇〇円)　知情意のバランスのとれた人間像が求められ、総合的な文化を身につけることが日本人全体に提起されている現在、混迷の原因を分析し世界に占める日本の位置を知り、我々はどうすべきか、政策と文化の融合をどのように理解していったらよいか追究したテキスト。

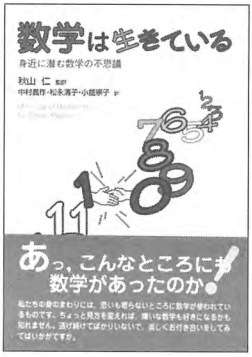
東海大学出版会

▼テオニ・パパス著/秋山仁監訳『数学は生きている—身近に潜む数学の不思議』(二七〇〇円)

「あっ、こんなところにも数学があったのか!」と、我々の身のまわりには思いがけないところで数学が使われていることがある。パズルやゲーム、美術や音楽、その他の自然界のあらゆる事象も数の世界と深い関係がある。

本書は、日常生活や自然界で出会う数の世界や、数学に関係深い話題を一八二の項目で紹介している。

いくら「数学なんて興味がない」、「嫌いだ」と言ったところで、決して数学からは逃げられないのだ。むしろ、少し見方を変え、嫌いな数学を好きになった方がいいだろう。



東京大学出版会

▼栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『シリーズ越境する知』（全6巻）

日本の新しい知の布置が到来したことを確信させる現代思想のシリーズが刊行開始となった。いま話題の執筆者がそろい、読み手の知的枠組みが組みかえられてしまうのがこのシリーズの仕掛けだ。①「身体：よみがえる」（七月刊）、②「語り：つむぎだす」（八月刊）、③「言説：切り裂く」（九月刊・以上各巻二六〇〇円）、続刊として④「装置：壊し築く」、⑤「文化の市場：交通する」、⑥「知の植民地：越境する」（各巻予価二六〇〇円）の全6巻。また、「0巻」として、編者が自分自身を問うた▼『内破する知――身体・言葉・権力を編みなおす』（一二〇〇円）がすでに刊行されている。

東京電機大学出版局

インターネットが急速に普及しつつある現在、情報の世界における安全の確保が急務であることに異論はないだろう。しかしながらそのための方法論や法制度、セキュリティ意識の面において、日本での取組は十分とは言えない。

欧米では、情報セキュリティの客観的な評価とその標準化に関する優れた成果が各国の取組の中であげられており、その一つの集大成が本書で取り上げる情報セキュリティ評価基準「ISO15408」である。

本書では「ISO15408」で提示されている体系的な情報セキュリティ対策とその考え方の概観を解説した。IT技術者およびシステム担当者必読の書である。

『ISO15408
情報セキュリティ入門』
内山政人著
本体3,500円（税別）

東京農業大学出版会

〈シリーズ実学の森〉

都市、緑と農
――「農」が担う地球の将来

東京農大学長　進士五十八著

環境の概念をとらえる基本知識を学ぶ、市民参加のまちづくりなど、これからのまちづくりを考えるための必携書。新世紀は「都市」の中に「農村」の良さを取り込む時代であるという。「都市」と「農村」の共生がそこにある。「都市」は生産も生活も環境も人間もバラバラに効率本位につくられてきた。

「農村」は生産も生活も環境も総合されている。農地や緑のもつ重要性について語るとともに、「農」の一文字がもつたくさんの意味について説く。地球の将来は「農」の多面的機能が担うのだという熱弁の書である。

『横井時敬と東京農大』『沙漠よ緑に甦れ』に次いで、シリーズ実学の森第三集である。

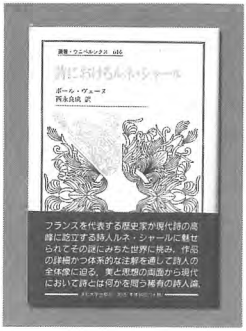
平成一二年七月刊／B六版／一二八頁／本体価格七〇〇円

法政大学出版局

▼第七回「日仏翻訳文学賞」受賞！

日本文学のすぐれたフランス語訳ならびにフランス文学のすぐれた日本語訳を顕彰することを目的として一九九四年に創設された「日仏翻訳文学賞」は第七回を迎え、本年度の日本側受賞図書として小局刊、ポール・ヴェーヌ著『詩におけるルネ・シャール』（西永良成訳）が選ばれました。小局刊行書としては、第二回の『ピエール・ベール著作集』（野沢協訳）に続いて二度目の受賞となります。

六月二一日、東京会館シルバールームに選考委員である大岡信・大江健三郎・石井晴一・清水徹の各氏および関係者を招いて贈呈式ならびに祝賀パーティが行われ、訳者の西永良成氏に賞状と賞金が手渡されました。



『詩におけるルネ・シャール』
四六判・830頁・9,400円

放送大学教育振興会

▼放送大学が設置する大学院は、現在設置認可申請中であり、認可されれば組織としては、平成十三年四月に設置され、十四年四月から学生を受け入れることとなる予定である。

この大学院は、放送授業・印刷教材・通信指導・研究指導を柱とする通信制の大学院であり、広く社会のすべての人々に開かれた生涯学習機関として、学習者が職場や生活の場を離れることなく、二十一世紀を生きる高度専門職業人に不可欠な、総合的教養学に裏づけられた高度な専門的学識及び知的技能を修得できるよう、現代の知の最先端を踏まえつつ、急激な国際化と情報化の地平に適合した柔軟かつ実効的な教育を行うこととしている。

▼七月十四日、千葉市・ホテルグリーンタワー幕張において、放送大学主任講師（大学院開設科目及び平成十四年度学部開設科目）会議が開かれた。専任教員・客員教員、ディレクター、編集者等が、全体会議、大学院プログラム別部会、学部科目専攻別部会に出席した。十四年度印刷教材編集作業の正式スタートである。

明星大学出版部

▼塚田紘一著『子どもの発達と環境――児童心理学序説――』近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー（Rousseau, J-J.）の子どもを中心にすえた児童観によって児童は研究対象になる。ルソーは「エミール」の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならない存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をあたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずか百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童の心理の最新情報を解説。（目次―抜粋―）第一章　発達の基本的理解、第二章　児童研究の方法、第三章　発達初期の展開、第四章　身体と運動機能の発達、第五章　認知発達、第六章　知能と創造性、第七章　情緒・動機、第八章　遊び、第九章　社会性、第十章　自己意識、自己概念、第十一章　親の児童観と教師＝生徒間の信頼関係。

早稲田大学出版部

▼『比較政治学―構造・動機・結果』（G・サルトーリ、岡沢憲芙監訳／工藤裕子訳、三〇〇〇円）議院内閣制、大統領制等の政治制度や選挙制度の国際比較を通して政治システム論の新手法を提示する。

▼『スウェーデン現代政治史―対立とコンセンサスの20世紀』（S・ハデニウス、岡沢憲芙監訳／木下淑恵・秋朝礼恵訳、二八〇〇円）議会政治の登場からEU加盟まで、福祉国家への歩みを政治的エポックを中心に丹念にたどる。

▼〈内田満政治学論集全3巻〉が完結した。最終回配本③『現代のデモクラシー』（四七〇〇円）は、日本とアメリカを対比して急激な都市化、高齢化がデモクラシーに及ぼす影響を探り、政策論に踏み込んで政治学を構想する。　＊内容見本送呈

名古屋大学出版会

▼和田光弘著『紫煙と帝国―アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済―』（五八〇〇円）イギリス第一帝国に組み込まれた北米タバコ植民地の社会・経済の変容と、その歴史的構造を多角的に描き出す。

▼浜島信之著『多変量解析による臨床研究［第三版］』（四八〇〇円）治療効果などの判定に用いられる多変量解析の中心的手法を「landmark法」「メタアナリシス」等、最新の知見を加え解説。

▼L・コリー著　川北稔監訳『イギリス国民の誕生』（五八〇〇円）一体感はいかにして生まれたのか？　プロテスタント文化、対仏抗争、海外帝国と「イギリス人」意識の関係を解明。

▼齋藤英彦・吉田純編『遺伝子医療―基礎から応用へ―』（二八五〇〇円）遺伝子治療を中心に遺伝子の基礎から、遺伝子診断、生殖医療などの臨床応用の最先端までを系統的に解説。

▼E・L・ジョーンズ著　安元稔・脇村孝平訳『ヨーロッパの奇跡―環境・経済・地政の比較史―』（三八〇〇円）ヨーロッパの成長要因を、環境・政治システムの相互連関を軸に超長期的視野で解明。

京都大学学術出版会

▼『ローマ喜劇集1』（西洋古典叢書第Ⅱ期4）木村健治他訳・四五〇〇円／ギリシア新喜劇を下敷きに、ローマ人の生活・習慣をも娯楽的要素として盛り込んだ大衆的喜劇作品集。後世に影響を与えた代表作『アンピトルオ』『捕虜』など、文学史上世界初の職業作家プラウトゥスの現存する21作品を、テレンティウスの作品と合わせ新訳（全五冊）で刊行する。

▼『霊長類生態学』杉山幸丸編著・三五〇〇円／食う―食われる、エネルギー収支、どうやって子孫を残すか……。サルたちの暮らしぶりを多彩な環境との相互作用のなかで考え、その生理・行動・社会に生態学的視点から鋭く切り込んだ最新の成果を結集する。霊長類学の新たなスタンダードを築く画期的な一冊。

▼『中小企業における法と法意識』村中孝史、Th・トーマンドル編著・四二〇〇円／「法に触れる」という言葉に象徴されるように、極力、法と関わらないで生きることを良しとしてきた日本人の法意識と法の実効性を、中小企業の現場を舞台に明らかにする。〈国際化〉時代の法のあり方を示す、日欧共同研究の成果。

大阪経済法科大学出版部

七月に起きた乳業メーカーの食中毒事件は、発生が大阪工場ということもあり、関西では注視されている。マスコミでは企業危機管理云々の論調が目立つ。しかし、事件発生後の会社の対応がどうであったかより、食品会社としての企業倫理の問題ではないのだろうか。

▼**『経営倫理論』**金　元銖（キム・ウォンス）著（A5版・三七〇〇円）

著者は韓国の経営学の重鎮であり、昨年度より本学で教鞭を執られている。春からの企画であり、このような事件の発生は予想もしていなかったのであるが、本書は経営倫理のあり方に多くの視座を与えてくれる。企業の技術的合理性に偏った論理的意志決定を主とすることに対し、倫理的意志決定の重要性を力説する。「人間と倫理」から「経営倫理」と展開され、企業の組織的意志決定も最終的には個々人の倫理意識に依拠し、それを組織としてどう具現化するかを論述する。

第1編　経営倫理論の学問的性格
第2編　人間と倫理
第3編　経営倫理
第4編　経営倫理教育論

大阪大学出版会

紀元前四世紀の、オックスフォードの教本でわずか四十七頁の書物が、いまなお世界に刺激を与えつづけている。

▼當津武彦大阪大学名誉教授のライフワーク**『アリストテレス『詩学』の研究』**がここに上・下巻完結。上巻＝**『詩学』の問題と展開**、下巻＝**『詩学』の背景と後代**を副題とする。A5・各巻一万円。

Aristotle:Poetics は、古代ギリシア劇論・詩論としての歴史的・地域的制約を超越している世界的な古典の名著である。著者は、この『詩学』をめぐってルネサンス以来なされてきた二千を越える世界の研究成果を参照し、アリストテレスの全哲学体系のなかに位置づけ、文芸学の普遍的な原理として再評価する。

▼橋本介三・小林伸生・中川幾郎**『日本産業の構造変革』**A5・二八〇〇円。

日本産業の構造変革は焦眉の課題にかかわらず、本格的な経済分析はいまだにない。著者らはオーストリア学派の理論を使って、産業集積地域や中小企業政策、そのほか都市政策と都市計画などを分析し、新たな視点から二十一世紀の産業や地域のあり方を提言する。

関西大学出版部

▼網干善教編**『世界の考古学』**（二四〇〇円）本書は、関西大学博物館開館一周年記念として開催された公開講座の講演記録。世界各地の著名な十遺跡の発掘調査担当者が豊富な図版や写真を駆使し、最新の調査成果を解説する。考古学的な成果だけでなく、各担当者が経験した異文化体験談としても興味深い。

▼宇佐見太市著**『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』**（二六〇〇円）チャールズ・ディケンズのクリスマスもの五篇（『クリスマス・キャロル』『鐘の音』『炉端のこおろぎ』『人生の戦い』『憑かれた男』）をテキストに即して読んだ作品論集。『クリスマス・キャロル』に関する翻訳本の検証によりディケンズがいかに日本で愛読されてきた作家であるかも解明。

▼久保田賢一著**『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』**（一九〇〇円）本書は、構成主義というポスト近代のパラダイムを軸に、マルチメディア時代に適合した学習環境を構築していく理論的基礎を提供する。インターネットやテレビ会議などを取り入れた高等教育における教育実践も紹介している。

九州大学出版会

▼M・クレッカー、U・トゥヴォルシュカ編／石橋孝明訳『**諸宗教の倫理学―その教理と実生活―第4巻　所有と貧困の倫理**』（四六判・二二四頁・二五〇〇円）このシリーズは基本的な生活のただなかで、宗教が人間の倫理的な行為をどのように形成していくかを、世界の主要な宗教についてテーマ別に概観したものである。第4巻は富と貧困に対する諸宗教の態度と取り組みを探る。（既刊）[1]『性の倫理』、[3]『健康の倫理』、[5]『環境の倫理』。続巻[2]『労働の倫理』で全5巻完結。

▼時永祥三『**複雑系による経済モデル分析**』〈経済工学シリーズ・第2期〉（A5判・二五〇頁・三〇〇〇円）経済工学は経済学と数学および情報の三位一体の研究の総称といってよいだろう。「第二世代」の研究スタッフ陣による第2期経済工学シリーズの第4巻。

▼小栗一太・赤峰昭文・古江増隆編『**油症研究―三十年の歩み―**』（B5判・三五六頁・九二〇〇円）PCB及び関連塩素化合物によって起こった未曾有の集団食中毒事件の原因解明の全貌をまとめ、環境汚染と生体影響に関する優れた資料。

東北大学出版会

▼久道茂『**公衆衛生の責任**』（四六判、二五〇頁、一六〇〇円）著者が学会等で行った講演を整理し、読者に分かりやすく著した啓蒙の書。これまでの日本の公衆衛生は、疾病予防、健康増進、母子保健、環境保健等々、人々の生活の向上や保健・医療活動の中で大きな役割を果たした。しかし、現在の我が国は、高齢少子化問題、新しい感染症の発生、老人医療と福祉、環境問題など多くの課題を抱えている。東北大学医学系研究科長であり厚生省公衆衛生審議会長である著者が、自らの研究・教育を省みながら、公衆衛生の在り方と責任を探った必読の書。

▼北村晴朗『**全人的心理学―仏教理論に学ぶ―**』（A5判、四六四頁、三〇〇〇円）人間の個々の行動を全体的に解明する全体的心理学には、人間の煩悩や善の心の働きによる迷いやその迷いを超脱する修行といった問題は含まれない。これらを総合的に扱うのが全人的心理学である。本書は、その萌芽にあたる部分を語ると共に、全人的心理学の一典型といえる唯識心理学の主要問題を追求する。一般心理学や仏教心理学の問題点も分析する。

流通経済大学出版会

▼現在、小会が製作を担当している流通経済大学の紀要は年間一〇冊である。その中に『物流問題研究』がある。本誌は、大学唯一の附置研究機関である「物流科学研究所」が発行者である。「物流科学研究所」は昭和四八年に創設された。当初は産業経済研究所と称し、所報として『流通問題研究』を、昭和五五年に創刊した。これが『物流問題研究』の前身である。

本誌発行の趣旨について、第一号の「創刊の辞」では次のように述べている。

「最近の日本経済において、企業・経済界は減量経営を徹底させるとともに、同時にこれからの時代に即応した省エネルギー化を含む技術革新を行わねばならず、減量と革新という時には矛盾する要因を含んだ困難な課題を背負うことになる。……ここに創刊される『流通問題研究』が、これらの重要な課題を果たすために大きな貢献をすることを希ってやまない。」

現在のIT革命は、この矛盾する課題を同時に解決出来る可能性を秘めている。改めて技術革新の凄さに瞠目させられる。

三重大学出版会

ジミー・ウォーカー著、松岡典子訳『戦争捕虜二九一号の回想ータイメン鉄道から南紀イルカへ』（A五判・二五六頁・一二〇〇円）第二次世界大戦中、英国より出征してきた兵士たちは、シンガポール到着後わずか十日で捕虜となりタイメン鉄道建設の重労働に就かされる。その後さらに三百名の英国兵士が、日本は三重県の山中「イルカ」村に送られ、銅山採掘に従事させられる。一年四か月の労働の後終戦を迎え、彼らはイルカに十六名の墓碑を残し、無事英国へ帰還した。それから四十七年。共に銅山採掘をした南紀のかつての中学生たちに日本へ招かれた元英兵たちは……。

ウォーカー氏は一介の兵士であり、彼の回想記は、彼の身の回りの出来事を書き綴ったものに過ぎない。だが物不足の兵営で文案を練り、記録を綴り、ニュースを発行する彼を見て、英国民なら「ハレルヤ」というだろう。過酷な体験を良識化できる人に幸い有れ、というわけだ。その回想記を読むと、戦争が反面、非常に個人的な体験をもたらすものであることを痛感する。

関西学院大学出版会

▼大井浩二『センチメンタル・アメリカ―共和国のヴィジョンと歴史の現実―』（四六判・三二〇頁・予価二九〇〇円）文学研究において、センチメンタリズムが対象として取り上げられることはほとんどない。しかしながら、アメリカ小説の文脈のなかでセンチメンタリズムに目を向けたとき、地理的フロンティアの喪失にともなう美徳の共和国という理念の崩壊を前にして、それに抗おうとする国民的メンタリティーの系譜が浮き彫りになる。ポピュラー・カルチャーを視野に入れながら、国家とその共同幻想の行方を追う、ユニークな文化論。

▼チェイス・オニズカ・ヨーコ『*Dances of Zoë: A Study of the Politics of Dionysus in Modern Theater*』（A5判・二二二頁・三七〇〇円）古代ギリシアの葡萄酒と祝祭の神であるディオニソスは、いかにして「ゾーエ」（永遠の生命）を宿し、近代演劇の中に蘇ったのか。ロゴスの専制の前に、時空を超えて現れるトリックスターを通して、古代から近現代にいたる西洋の文化史を概観する。英文（巻末に日本語論文を収録）。

新刊案内 '00・7～'00・9

■北海道大学図書刊行会
十勝の自然を歩く［改訂版］　十勝の自然史研究会編　一八〇〇円
21世紀・新しい「いのち」像―現代科学・技術とのかかわり―　馬渡峻輔・木村純編著　一八〇〇円
自治と政策―北海道大学法学部ライブラリー 5―　山口二郎編　四八〇〇円
ベア・アタックス―クマはなぜ人を襲うか― Ⅰ　S・ヘレロ／嶋田みどり・大山卓悠訳　二四〇〇円
ベア・アタックス―クマはなぜ人を襲うか― Ⅱ　S・ヘレロ／嶋田みどり・大山卓悠訳　二四〇〇円

■聖学院大学出版会
ニコラウス・クザーヌス　渡邉　守道　五八〇〇円
政治神学再考　深井　智朗　二六〇〇円

■麗澤大学出版会
宇宙進化論　ジョン・グリビン／立木教夫訳　三六〇〇円
50歳からのパソコン交遊術　高橋三雄　八五〇円

■慶應義塾大学出版会
ドイツ農民戦争と宗教改革―近世スイス史の一断面―　野々瀬浩司　五〇〇〇円
パシフィック・ウェイ―フィジー大統領回顧録―　カミセセ・マラ著／小林泉・東裕・都丸潤子訳　三八〇〇円
ハイテク犯罪と刑事手続〈慶應義塾大学法学研究会叢書69〉　安冨　潔　四〇〇〇円
十二世紀ルネサンス　―修道士、学者、そしてヨーロッパ精神の形成―　D・ラスカム著／鶴島博和・吉武憲司編訳　三八〇〇円
詈堂　尾崎行雄〈Keio UP選書〉　相馬雪香・富田信男・青木一能編著　二四〇〇円
変革する思考　―思考と現実との関係についての批判的・存在論的論考―　U・グッツォーニ著／小松光彦訳　二八〇〇円
地方自治の国際比較―台頭する新しい政治文化―　テリー・ニコラス・クラーク、小林良彰編著／三浦まり訳　七〇〇〇円
美術史の基礎概念―近世美術における様式発展の問題―　ハインリヒ・ヴェルフリン著／海津忠雄訳　一〇〇〇〇円
慶應義塾体育会蹴球部百年史　慶應義塾体育会蹴球部黒黄会編　一八〇〇〇円
フサイニー師「イスラーム神学五〇の教理」―タウヒード学入門―　奥田敦訳／著　二六〇〇円
南極条約と国際法―領土、資源、環境をめぐる利害の調整―　池島　大策　八〇〇〇円
東アジア経済協力の現状と可能性〈日韓共同研究叢書（第1期）1〉　野副伸一・朴英哲編　三四〇〇円
近代交流史と相互認識Ⅰ〈日韓共同研究叢書（第1期）2〉　宮嶋博史・金容徳編　三八〇〇円
生命探究の姿勢―ヴェサリウスからゲノム解析まで―

脱芸術／脱資本主義論―来るべき〈幸福学〉のために―　西村　顕治　二五〇〇円
熊倉　敬聡　三〇〇〇円

■産能大学出版部
経営者のＩＴ知識　猪目　宰正　一八〇〇円
歯のかみ合わせと病気―テンプレート療法の理論と効果―　前原潔編著　一八〇〇円

■専修大学出版局
戦後政治の争点　1945-1970　藤本　一美　三三〇〇円

■玉川大学出版部
科学と宗教―一つの世界―　Ｊ・ポーキングホーン／本多峰子訳　二八〇〇円
高等教育と政策評価　喜多村和之編　四八〇〇円
金剛家の面―金剛流二十六世宗家継承記念―　金剛永謹　三五〇〇円
自然と文化―アメリカの風景と絵画　1825―1875―　Ｂ・ノヴァック／黒沢眞里子訳　四八〇〇円
科学技術社会と大学―エリック・アシュビー講演集―　Ｅ・アシュビー／宮田敏近訳　三二〇〇円
学長　大学改革への挑戦　天野郁夫編　二五〇〇円
カバディ―ルールと戦術―　Ｅ・Ｐ・ラオ／金子茂訳　五二〇〇円

■中央大学出版部
道徳を超えたところにある法律家の役割―相談助言と依頼者の責任―　Ｓ・Ｌ・ペパー／住吉博編訳　四〇〇〇円
ドイツ法・ヨーロッパ法の展開と判例　川添利幸・小島武司編　一九〇〇円
現代資本主義と労働価値論　中央大学経済研究所編　二六〇〇円
国際契約法　山内惟介編著　三一〇〇円
ライムント喜劇全集（上）（下）　ウィーン民衆劇研究会編訳　各四〇〇〇円
日本論―総合政策学への道―　中央大学大学院総合政策研究科日本論委員会編　三三〇〇円
ドイツ・オーストリア国際私法立法資料　桑山三郎・山内惟介編著　七一〇〇円

■東海大学出版会
時間と支配―時間と空間の文明学―　齋藤道子編著　二八〇〇円
ベンチャー企業のさきがけ―秋田から国際舞台へ　ＴＤＫの軌跡―　関科学技術振興記念財団編　二三〇〇円
大気海洋の化学像形成と地球温暖化―地球環境における炭酸塩物質の発言―　北野　康　六三〇〇円
数学は生きている―身近に潜む数学の不思議―　テオニ・パパスト　秋山仁監訳／中村義作・松永清子・小舘崇子訳　二七〇〇円
衝突天体の気体力学―流星はなぜ光るのか？―　ストゥーロフ・ミルスキー・ビースルイ／輿石肇・久保田弘敏訳　四八〇〇円
ニホンザルによる農作物被害と保護管理　ニホンザル保護管理のためのワーキンググループ・渡邊邦夫　一五〇〇円
日本語初級Ⅰ　文法説明（中国語版）　東海大学留学生教育センター編　二〇〇〇円
日本語初級Ⅱ　文法説明（中国語版）　東海大学留学生教育センター編　二〇〇〇円
アメリカの大学事情　渡部　哲光　二二〇〇円
ベルツ　日本再訪―草津・ビーティッヒハイム遺稿集／日記編―　エルヴィン・ベルツ／若林操子監修／池上弘子訳　四五〇〇円
土の力学　近藤　博・本間重雄・綿引恵一　二〇〇〇円

アンナ・カレーニナ（上）〈トルストイ三大長編〉第二回配本　北御門二郎訳　二八〇〇円
アンナ・カレーニナ（下）〈トルストイ三大長編〉第二回配本　北御門二郎訳　二八〇〇円
建築設備施行管理者マニュアル—事務所経営と仕事のすすめ方—　川口　秀人　五八〇〇円

■東京大学出版会

身体：よみがえる〈越境する知1〉　栗原　彬・小森陽一・佐藤　学・吉見俊哉編　二六〇〇円
権力〈社会科学の理論とモデル3〉　盛山　和夫　二六〇〇円
戦後日本の教育社会〈日本の階層システム3〉　近藤博之編　二八〇〇円
東京大学公開講座71　夢　二八〇〇円
考古学と化学をむすぶ　UP選書278　馬淵久夫・富永　健編　二四〇〇円
イギリス風景式庭園の美学——〈開かれた庭〉のパラドックス　安西　信一　七二〇〇円
戦後日本の中国政策——一九五〇年代東アジア国際政治の文脈　陳肇斌　六二〇〇円
新装版　日米関係史　開戦に至る十年（一九三一—四一年）
細谷千博・斎藤　真・今井清一・蝋山道雄編
1—政府首脳と外交関係　四五〇〇円
2—陸海軍と経済官僚　四五〇〇円
3—議会・政党と民間団体　五五〇〇円
4—マス・メディアと知識人　四五〇〇円
中世荘園絵図の解釈学　黒田日出男　五六〇〇円
戦略的アウトソーシングの進化　西口　敏宏　七〇〇〇円
楕円関数論——楕円曲線の解析学　梅村　浩　四八〇〇円
クモの生物学　宮下　直編　五二〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇126　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇162　国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
語り：つむぎだす〈越境する知2〉　栗原　彬・小森陽一・佐藤　学・吉見俊哉編　二六〇〇円
決定〈社会科学の理論とモデル4〉　宇佐美　誠　二五〇〇円
階層社会から新しい市民社会へ〈日本の階層システム6〉　高坂健次編　二八〇〇円
大内力経済学体系　第7巻　日本経済論　上——日本資本主義の史的分析　常木　淳　一二〇〇〇円
費用便益分析の基礎　青木　浩子　三二〇〇円
国際証券取引と開示規制　小倉　義光　七八〇〇円
総観気象学入門　四〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇127　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇163　国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇164　国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
言説：切り裂く〈越境する知3〉　栗原　彬・小森陽一・佐藤　学・吉見俊哉編　二六〇〇円
コミュニケーション〈社会科学の理論とモデル5〉　池田　謙一　二八〇〇円
公平感と政治意識〈日本の階層システム2〉　海野道郎編　二八〇〇円
現代中国の構造変動6——環境—成長への制約となるか　小島麗逸編　三八〇〇円
日本語を考える——移りかわる言葉の機構　山口　明穂　二八〇〇円
秋成研究　長島　弘明　六五〇〇円
学校を欠席する子どもたち

——長期欠席・不登校から学校教育を考える　保坂　亨　二八〇〇円
ヨーロッパ政治ハンドブック　馬場康雄・平島健司編　二八〇〇円
刑法総論　林　幹人　三五〇〇円
経済学入門　鬼塚雄丞・岩田一政・柳田辰雄　二五〇〇円
近代・イスラームの人類学　大塚　和夫　五六〇〇円
地表面に近い大気の科学——理解と応用　近藤　純正　三八〇〇円
日本の国会政治——全政府立法の分析　福元健太郎　五四〇〇円
近世中国の比較思想——異文化との邂逅　岡本　さえ　一八〇〇円
家族・世帯の変容と生活保障機能　国立社会保障・人工問題研究所編　四八〇〇円

■東京電機大学出版局
画像処理応用システム—基礎から応用まで—　㈳精密工学会画像応用技術専門委員会編　三四〇〇円
たのしくできる単相インバータの製作と実験　鈴木美朗志　二一〇〇円
ISO15408情報セキュリティ入門　内山　政人　三五〇〇円
オブジェクト指向のためのJava入門　増田　英孝　二二〇〇円
電波の基礎と応用〈理工学講座〉　三輪　進　二三〇〇円
Mathematicaによる通信工学　榛葉　實　二一〇〇円
力学〈理工系の物理学@Mathematica〉　小畑　修二　二三〇〇円
Mathematicaによる金融工学　椎原　浩輔　二四〇〇円

■東京農業大学出版会
シリーズ実学の森／都市、緑と農—「農」が担う地球の将来　進士五十八　七〇〇円

■法政大学出版局
数学史のなかの女性たち［新装版］　L・M・オーセン／吉村証子・牛島道子訳　一七〇〇円
哲学を讃えて—フランス語で書いた思想家たち—　M・セール／米山親能・和田康・清水高志訳　三四〇〇円
ノーを言う難しさ—宗教哲学的エッセイ—　K・ハインリッヒ／小林敏明訳　二五〇〇円
キッチン—レストランの文化誌—　G・A・ファイン／藤澤・小池・谷林訳　四九〇〇円
イスラームにおける女性とジェンダー—近代論争の歴史的根源—　L・アハメド／林正雄・岡真理・他訳　四五〇〇円
少年の日の敗戦日記—朝鮮半島からの帰還—　岩下　彪　三八〇〇円
アジアの金融危機とシステム改革　法政大学比較経済研究所・鷲見誠良編　四二〇〇円
遍歴時代—精神の自伝—　J・アメリー／富重純子訳　二五〇〇円
私の文化遺産踏査記Ⅰ—南道踏査一番地—　兪弘濬／大野郁彦訳　四三〇〇円
〈韓国の学術と文化4〉
私の文化遺産踏査記Ⅱ—山は川を越えられず—　兪弘濬／宋連玉訳　四三〇〇円
〈韓国の学術と文化5〉
野良着〈ものと人間の文化史95〉　福井　貞子　二九〇〇円
食具〈ものと人間の文化史96〉　山内　昶　二九〇〇円
史的唯物論の再構成　J・ハーバマス／清水多吉訳　四二〇〇円
ペルシアの情景〈イスラーム文化叢書1〉　G・L・ベル／田隅恒生訳　二三〇〇円
スレイマン大帝とその時代〈イスラーム文化叢書2〉［新装版］　A・クロー／濱田正美訳　四七〇〇円
ベルクソン講義録Ⅲ—近代哲学史講義／霊魂論講義—　H・ベルクソン／合田正人・江川隆男訳　五五〇〇円
神は狂信的か—現代の悪についての省察—　J・ダニエル／菊地昌実訳　二五〇〇円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

■早稲田大学出版部
キリスト教と仏教の同質性―東洋型神学を求めて　長谷川洋三　三〇〇〇円
比較政治学―構造・動機・結果　G・サルトーリ、岡沢憲芙監訳　三〇〇〇円
現代政党学―政党システム論の分析枠組み［普及版］　G・サルトーリ、岡沢憲芙・川野秀之訳　三八〇〇円
スウェーデン現代政治史―対立とコンセンサスの20世紀　S・ハデニウス、岡沢憲芙監訳　二八〇〇円
ライフコースの社会学［新装版］　J・A・クローセン、佐藤慶幸・小島茂訳　三五〇〇円
内田満政治学論集（全3巻）最終回配本／第3巻　現代のデモクラシー　内田　満　四七〇〇円
早稲田大学理工総研シリーズ第16巻　環境に配慮したまちづくり　尾島俊雄・村上公哉　二〇〇〇円

■名古屋大学出版会
イギリス国民の誕生　L・コリー／川北稔監訳　五八〇〇円
ヨーロッパの奇跡―環境・経済・地政の比較史―　E・L・ジョーンズ／安元稔・脇村孝平訳　三八〇〇円
論理学をつくる　戸田山和久　三八〇〇円
思想の国際転位　水田　洋　五五〇〇円
遺伝子医療―基礎から応用へ―　齋藤英彦・吉田純編　六五〇〇円

■京都大学学術出版会
家族圏と地域研究〈地域研究叢書13〉　立本　成文　四七〇〇円
中小企業における法と法意識―日欧比較研究―　村中孝史、Th・トーマンドル編著　四二〇〇円
憎悪から和解へ―地域紛争を考える―　峯陽一、畑中幸子編　二八〇〇円
霊長類生態学―環境と行動のダイナミズム―　杉山幸丸編著　三五〇〇円
大雪山のお花畑が語ること―高山植物と雪渓の生態学―〈生態学ライブラリー10〉　工藤　岳　二一〇〇円
モラリア6〈西洋古典叢書第Ⅱ期3〉　プルタルコス／戸塚七郎訳　三四〇〇円
ローマ喜劇集1〈西洋古典叢書第Ⅱ期4〉　プラウトゥス／木村健治他訳　四五〇〇円
アルケー　2000―関西哲学会年報8―　関西哲学会編　一五〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
経営倫理論　金　元銖　三七〇〇円

■大阪大学出版会
アリストテレス『詩学』の研究（下）―『詩学』の背景と後代―　當津　武彦　一〇〇〇〇円

■関西大学出版部
世界の考古学　網干善教編　二四〇〇円
ディケンズと「クリスマス・ブックス」　宇佐見太市　二六〇〇円
構成主義パラダイムと学習環境デザイン　久保田賢一　一九〇〇円

■九州大学出版会
油症研究―三十年の歩み―　小栗一太・赤峰昭文・古江増隆編　九二〇〇円
所有と貧困の倫理〈諸宗教の倫理学―その教理と実生活―第4巻〉

M・クレッカー、U・トゥヴォルシュカ編／石橋孝明訳　二五〇〇円
出島のくすり　長崎大学薬学部編　一四〇〇円
複雑系による経済モデル分析〈経済工学シリーズ・第2期〉　時永　祥三　三〇〇〇円
超低温の実験技術　ウクライナ科学アカデミー低温物理工学研究所編／矢山英樹、I・B・ベルクトフ訳　四五〇〇円
音楽と映像のマルチモーダル・コミュニケーション　岩宮眞一郎　三六〇〇円
インドの文化と論理―戸崎宏正博士古稀記念論文集―　赤松明彦編　一五〇〇〇円

■東北大学出版会
公衆衛生の責任　久道　茂　一六〇〇円
全人的心理学―仏教理論に学ぶ―　北村　晴朗　三〇〇〇円
家族と個人の相克―平等再考―　樋口　晟子　三〇〇〇円

■流通経済大学出版会
インターネット経済・エネルギー・環境―電子商取り引き(EC)がエネルギーと環境に及ぼす影響のシナリオ分析―　J・ロム／若林宏明訳　三〇〇〇円

■三重大学出版会
戦争捕虜二九一号の回想―タイメン鉄道から南紀イルカへ―　ジミー・ウォーカー著／松岡典子訳　一二〇〇円

■関西学院大学出版会

▼滋賀県の近江八幡市で大学出版部協会の夏季研修会が開催され、帰途、同市多賀町の近江八幡市立「かわらミュージアム」に立ち寄った。河原ではなく、瓦の博物館である。瓦の製造工程をあらわした模型、道具類、琵琶湖の粘土で造られた瓦を中心とする日本と世界各地の瓦、職人が腕を磨くために造られたという瓦人形、さらには現代の瓦アートが展示され、来館者のための体験工房もある。

▼展示品のなかで、もっとも魅力的なのは、ごくあたりまえの「いぶし瓦」だった。その深みのある色は、光線により、あるいは角度によって、黒、灰色、銀色に変化する。華やかではないが気品があり、色鮮やかな洋瓦よりも遙かにモダンだ。

▼館外に出て屋根を見上げる。几帳面に並んだ瓦の列が陽を浴びて輝く様子に、ふと既視感を覚えた。もちろん、誰だって瓦なんか見慣れている。既視感があって当然だが、そういう意味ではない。それが何なのかに気づいたのは、米原からの新幹線の車中で、飛び去ってゆく甍(いらか)の波をぼんやりと眺めていたときのことだった。

▼それはひと昔前、いや、ふた昔前の、活版の町工場である。屋根形というには角度が急すぎるが、傾いた植字台に整然と並ぶ活字の列である。小さな工場では活字を再利用したから、谷(counter)の部分にはインクがこびりついて、全体としては黒

◉製作の現場から 22

甍(いらか)の波と文字の列

っぽく見えるのだが、裸電球の光に、時おり字面(じめん)が金属本来の輝きを放つ。それは風雨にさらされた瓦屋根が、古びてくすみながらも朝陽夕陽に輝くのと、何とよく似ていることか。

▼そういえば江戸時代には「瓦版」というものもあった。粘土に文字や絵を彫り込んで瓦の製法で焼き、これを原版とするスピード印刷の技法だ。この場合は似ているのではなく、瓦であり、同時に版でもある。

▼今ではもう、活版の現場を知る編集者は少なくなった。しかし、組版の実物を見れば、差し替えがいかに大変だったかは一目でわかる。ゲラ箱を持ち上げてみれば、活版職人がどれほどの重労働を強いられていたかが一瞬にして理解できる。単なる懐古趣味ではなく、現在の技術革新の意義を理解するために、若い編集者諸君には、たとえば博物館で、活字組版の実物に一度は接してほしいと思う。

▼とはいえ、組版の現物を見ても、工場見学をしても、それだけではわからないことも多い。たとえば、書籍の本文書体としてデジタル時代の現在もなおスタンダードの地位を保つ「明朝体」は、いつ、どこで生まれたのだろうか。それはどのように変化し、その過程にはどんな人びとがかかわり、いかなる苦労があったのか。そもそも、何で「明朝体」なのか。

▼こうした疑問に徹底的かつ実証的に答える本が出版された。印刷史研究会編『本と活字の歴史事典』である（柏書房発行、定価＝本体九五〇〇円＋税）。

▼正直にいえば、僕自身はまだこの本を通して読んだわけではない。今のところ、豊富な図版を眺めながら、ポツポツと拾い読みしている段階だ。なにしろB5判五一八ページ、厚さ三六ミリ、重さ一・四キロの本を、電車のなかで読むわけにはいかない。詳細な内容の紹介はまたの機会に譲り、今回は主要目次を紹介してお茶を濁させてもらうことにしよう。（かわら者）

▼本と活字の歴史事典／目次

きりしたん版について……大内田貞郎
駿河版銅活字――その成立と鋳造技法の解析……百瀬　宏
ヨーロッパ人による漢字活字の開発――その歴史と背景……鈴木広光
明朝体、日本への伝播と改刻……小宮山博史
幕末の洋書印刷物――活字による見分け方……髙野　彰
和文鋳造活字の「傍流」……府川充男

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
麗澤大学出版会	〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 TEL. 0471-73-3331　FAX. 0471-73-3154
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-6926　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230　FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 042-739-8935　FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7 TEL. 03-5214-5540　FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 042-591-9979　FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1　名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8305 京都府京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614　FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-6368-1121　FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777　FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県竜ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356　FAX. 059-232-1356
関西学院大学出版会(準会員)	〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 TEL. 0798-53-5233　FAX. 0798-53-9592

大学出版（第47号）2000秋　平成12年10月1日発行　発行所／大学出版部協会
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号　東大構内　東京大学出版会内　電話03（3812）2111（内）8956
E-MAIL：mail@ajup-net.com URL：http://www.ajup-net.com/
頒布価格一〇〇円　〒共